

近代日本における「家族」概念の構成

——花柳界の「家族主義」から——

慶應義塾大学大学院
本多真隆

1 はじめに

名高い吉原などに代表される花柳界は、戦前期においてはひとつの「家族」とみなされていた。以下は昭和期に、貸座敷業者の開いた大会に来賓として出席した国会議員の発言と、同時期の貸座敷業者の声明を、戦後に「家族」の問題として取りあげた、政治学者の丸山眞男の発言である。

「我国のような隅々伝統的公娼制度が行われて居る国は、私は寧ろ西洋に対して誇るべき処の習慣ではなからうかと思う。(…)日本の公娼制度は我国の家族制度、家族主義の根拠に関連している。」(全国貸座敷連合会部 1935: 83)

「……これを今日みる人は笑うかもしれないが、この言葉には笑えない真理がある。つまり、日本古来の醇風美俗といわれる家族主義精神は、待合、芸者あるいは遊里の世界に、最も典型的に、最も純粋な形で現れているのである。」(丸山 [1953]2008: 31)

以上の言説を頼りに、本報告は二つの問いに答えることを課題としたい。ひとつは、上記の貸座敷業者が主張するところの、花柳界の「家族主義」の意味内容を明らかにすることである。もうひとつは、当時の「家族」と花柳界の、共通点と差異を探ることである。

2 資料・方法

主な分析対象となるのは、『買売春問題資料集成〔戦前編〕』（不二出版）に収録されている文献である。上記の文献に加え、新聞記事や雑誌などの言説も必要に応じて取りあげる。並行してそれらを、近代日本の家族に関する言説とつきあわせ、花柳界を「家族」たらしめていた言説構造を明らかにする。

3 議論・結果

検討の結果明らかになるのは、「犠牲の精神」をはじめとした「家族主義」的な道徳が、花柳界の「家族主義」として称揚されていたということである。特に、女性の出自が貧しい農村から「身売り」されたということが「親孝行」の美談となっていた。そして「家（家族制度）」のために「犠牲の精神」を発揮することは、同時期の教条的な家族言説においても頻繁に見出されるものだった。

4 おわりに

上記の丸山の発言にみられるような、社会学者による「家族主義（家族制度）」への批判は、1950年代後半までにはほぼ収束している。そして赤線の廃止も同時期であった。報告ではこうした一致にも着目しつつ、「核家族」が支配的なイメージとなる以前の「家族」概念について考察する。

文献

丸山眞男, [1953]2008, 「復古調をどう見るか」『丸山眞男話文集1』みすず書房。
全国貸座敷連合会本部, [1935]1997, 『全国貸座敷連合会臨時大会記録』『買売春問題資料集成〔戦前編〕第8巻 存娼運動編II』不二出版。